復刻
デザイン・サーヴェイ
Design Survey

『建築文化』誌再録

明治大学　神代研究室
法政大学　宮脇ゼミナール
編著

彰国社

デザイン・サーヴェイ　参画メンバー

（『建築文化』誌記載順）

■ 明治大学神代研究室

神代雄一郎（こうじろ・ゆういちろう）　1922年－2000年

建築史家・建築評論家

1944年　東京帝国大学工学部建築学科卒業
1949年　東京大学大学院特別研究生終了後、明治大学理工学部建築学科助教授
1962年　「近代建築思潮形成過程の研究」で工学博士号
1993年　明治大学理工学部建築学科定年退職、名誉教授

宮崎学、藤間サキ子、山口宏、松島洋、越部一郎、神崎ひで女、松本勝邦、浅井秀一、宇佐美親夫、佐藤健一、三田村希一、室岡洋一、桜田淳、田島賢明、本多勉、松本静、森島幸治、芳村英俊、古磯隆生、小倉民雄、高山恵、原典子、吉村和彦、長尾俊夫、鈴木一行、吉野勝己、安藤良行、北河原智、千足和夫、千頭和陽明、山崎光邦、渡辺彬、白井哲彦、阿達敏雄、浅井康行、伊藤恭二、小田英一、大久保清、斉藤清一、高橋伸芳、三留一美、川原正明、大和一豊、浅野泉、大島正、坂本広昭、関本彰、土井真一、平尾正治、岸本博幸、国島亜星、龍井俊憲、富岡学、松本好司、西村浩、杉山正昭、重田清志、松本洋、佐伯昭則、川村正士、宮川伸子、橋口徹

■ 法政大学宮脇ゼミナール

宮脇檀（みやわき・まゆみ）　1936年－1998年

建築家

1959年　東京藝術大学美術学部建築科卒業
1961年　東京大学大学院修士課程修了
1979年　「松川ボックス」で日本建築学会賞作品賞受賞
1991－1998年　日本大学生産工学部建築工学科教授

中山繁信、阿部鷹司、岩佐哲雄、裏地脩介、大内敏行、坂本悠、谷山信春、長谷川博、丸山幹雄、山崎耕一、仁科和久、岡本真、下立正則、吉村純、内田和夫、源馬康弘、岡田英明、芦沢和美、福島徹、佐野健久、買場俊勝、小西正俊、渡辺泰彦、大久保秀治、高尾宏、島田敏夫、鈴木富夫、斉藤昭、岡田利幸、藤井慎吾、福井慎吾、川村茂広、清瀬壮一、小島建一、小林勝成、五来久、坂上和隆、里見真、白土周平、富田悦子、山口幸雄、山本純弘、山本容子、柳瀬輝久

復刻にあたって

1968年から1973年の5年間に『建築文化』誌が掲載した「デザイン・サーヴェイ」は、明治大学神代研究室によるもの4回、法政大学宮脇ゼミナールによるもの3回の計7回で、本書はこれらをまとめて復刻したものである。

特徴的な集落や地域などを選び、実地調査や分析を通してその空間デザインの意味や仕組みを読み解いた成果をグラフィカルに表現したこれら貴重なスタディの埋没を惜しむ声を以前から耳にしてきたが、それらに対してここに幾分かの応えを果たし得たかと考えている。

「デザイン・サーヴェイ」の概念については、堅苦しい規定などはないので、本書に収録したサーヴェイのチームリーダーお二人が本文で記述されていた関連部分を以下に抜粋することで、勝手ながらその解答のヒントとさせていただくことにした。

＊

「デザイン・サーヴェイは，アメリカではしきりに行なわれている。新しい建築設計課題がでると，その敷地を含むまわりの地域を実測調査し，模型をつくり，その中に設計してゆく。……またデザインに特別の魅力がある集落をみつけては，実測し，その魅力を構成している秩序を把える訓練をしている。……デザイン教育は理論的にもなされようが，デザイン・サーヴェイは具体的，体験的である点がいい。デザイン・サーヴェイには別に規則があるわけではなく，あくまでもデザインの魅力のよってくるところを実測することと，集落を対象にしている点が，歴史家の遺構の実測とちがっている。神代研のデザイン・サーヴェイが，祭りの調査もかねているのは，集落の美しさを支えている共同意義をも，合せ把えようとしているからである。」　（神代雄一郎）

「おのおの異なったサーヴェイの結果が，できるだけ多く，集積され重ね合せられた時，その結果としての都市なり，建築なりへの地味ではあるが地に足をつけた方法が見つけ出されるに違いない。そうした結果が出るまで，僕たちはさまざまな方向から，この面倒くさく，手間ばかりくい，そのくせ大向うをうならす結論が出なくて，現象分析的であると当り前なことをいわれる作業を続けねばなるまい。」　（宮脇壇）

＊

今から40年ほど前に諸先達が未来に託すべく残してくれた「デザイン・サーヴェイ」のレポートは本書収録の7編のほかにも多くあり、それらはこの7編を挟んで前後する時代に優れて多様な展開を見せている。本書との出会いを契機にさらに考究を進めたい読者のために、不完全を恐れつつも手懸かりとはなるだろうそれらの参考資料を若干巻末に添えておいた。

本書にあっては、2チームのスタンスの差異にもそれぞれが意図した意味を学べるであろうし、自然の中に構築された人々の集団的な生活の場の解析からは、その表層のデザイン手段や手法のみならず、深層に蓄積された思想や文化などに及ぶ伝統的な遺産が多く埋蔵されており、それらをも読み取っていただけるならば幸いである。なお、本書は初出の掲載誌がB4変形版だったのをA4変形版にやや縮小し、あきらかな誤植等を修正したほかは、何ら紙面に変更を加えていない。

末筆ながら、これら貴重な労作の復刻をご許可いただいた故神代雄一郎・宮脇檀両先生のご遺族並びに明治大学神代研究室・法政大学宮脇ゼミナールの関係各位に対し、厚く感謝申し上げます。

2012年3月　編集部

目次

復刻にあたって 3

■ 明治大学神代研究室

「風と海 祭りと集落」女木島 5
「舟屋のある集落と祭り」伊根 亀山 29
「海を渡る神 烏賊を干すたな」壱岐 勝本 53
「石で斜面に築いた集落」高知 沖の島 77

■ 法政大学宮脇ゼミナール

「街をつくる道」馬篭 101
「単純核の構成」五個荘 117
「坂のシークエンス」金比羅 133

地域の資料 155
「デザイン・サーヴェイ」の背景と展開 156

デザイン＝水野哲也（Watermark）

海と風，祭と集落

この集落には冬，激しい季節風が吹きつける。ひとびとは石垣を築き，潮まじりの風を避けて，ひっそりと耐える。だが夏には，出かせぎの若衆がもどって，太鼓台をかつぎだし，ひとびとは灼熱の太陽のもとに結集して，多彩な祭をくりひろげる。冬は自然が狂い，夏は人間が酔う。この自然と人工がよつに組んだ姿に，わたしたちは魅せられ，それを実測し記録した。

デザイン・サーヴェイは，アメリカではしきりに行なわれている。新しい建築設計課題がでると，その敷地を含むまわりの地域を実測調査し，模型をつくり，その中に設計してゆく。再開発計画の場合も，現状実測図がもとになる。またデザインに特別の魅力がある集落をみつけては，実測し，その魅力を構成している秩序を把える訓練をしている。神代がその実態を見てきて，とくにデザイン教育に効果のあることを認めとりあげた。毎年夏季休暇に，ゼミ学生と大学院生を主体にして行なっている。
デザイン教育は理論的にもなされようが，デザイン・サーヴェイは具体的・体験的である点がいい。デザイン・サーヴェイには別に規則があるわけではなく，あくまでもデザインの魅力のよってくるところを実測することと，集落を対象にしている点が，歴史家の遺構の実測とちがっている。神代研のデザイン・サーヴェイが，祭の調査もかねているのは，集落の美しさを支えている共同意識をも，合せ把えようとしているからである。

（神代雄一郎）

明治大学神代研究室

亀山 家並み その1

S=1:300 (91%縮小)

亀山　生活の構成

まず道を背骨に，土足で使われる土間空間を，母屋や舟屋の内に追っていってみよう。母屋の入口から背後におよぶ細長いニワ(土間)は，入口側に土足でつかえる小便所のある場合が多いが，内部は格子戸によって二分され，入口近い部分が他人との接触に，奥の部分は広くなって炊事に使われ，山据え下の湧き水を利用した内井戸があり，一隅に風呂場もある。道をはさんだ舟屋でも，入口に便所がある。便所にならんで物置があるから，舟屋への入口は非常に狭い。そして奥にはいると，それは広い土間になり，床は前にむかってゆるく傾斜し，丸太を横に埋めて舟をひきあげやすい姿になっている。つまりここでも，母屋と同じように，奥にゆくほど広い作業空間がある。

おそらく，山側の広い作業空間(炊事のニワ)は，山麓に井戸を掘って水を得るために，ひときわ山側に引き寄せられ，女性の家事労働の場を形成し，一方海側の広い作業空間は，漁に関した生業のために，ことさら海に引き寄せられて，男性の労働の場が形成されたのだろう。そしてその結果，その中間に生み出された空地が，外部の作業空間(庭)として残り，その横方向への連らなりが通路をかね，やがて現在の道に発展していったのである。現在の道路がつくられる以前，この庭分の幅は一定せず，たとえば，あるところは傘をさしては通り抜けられなかったといわれている。

次に座敷に注目しよう。母屋の間取りは細長い土間(ニワ)に対して田の字型に四室があり，山側に納戸ようの小室がひとつつき，道側には縁があって，道との間に低い格子が入り，スダレが下っている。縁つづきの奥の室が表座敷で，必ず床(とこ)の間と仏壇があり，冠婚葬祭の場として使われ，その折に縁の格子・スダレを取除くと，道(かつての庭)と表座敷は一体となる。われわれのみた祭の日，床には八坂神社・八幡神社と墨書した軸がかかり，縁の軒先に提灯が掛けられた。

この表座敷・縁，それにニワの入口近い部分を合せて，各戸のハレの場と考えれば，それは道とつながることによって，集落全体のコミュニケーションの場となり，ハレの機能をもつ空間に拡大する。それが先の，日常労働空間，つまりケの場が，道から離れて海なり山なりに近いほど広くなっている姿と，完全な対比をなしているのは，注目されてよかろう。

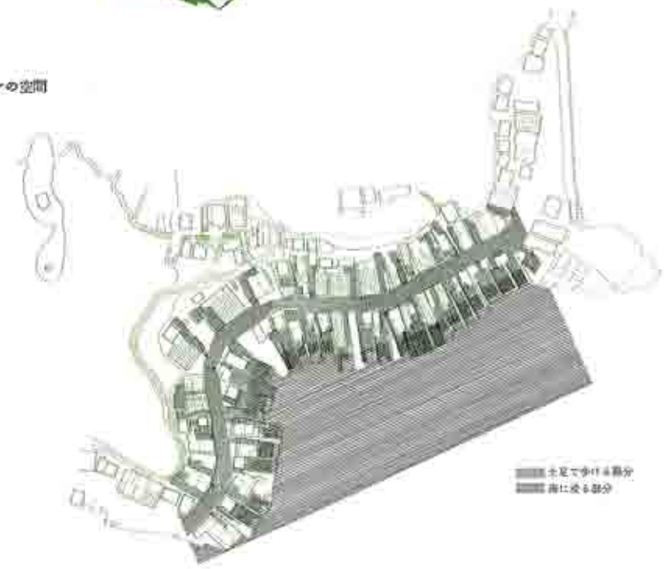
伊根湾では，近世初期すでにブリ刺網など各種の網漁が行なわれていた記録があるが，網漁となると，単一家族では不可能で，多くの漁船の組合が必要となる。亀山にもみられる親方子方の関係は，政治的な意味あいよりも，むしろこうした漁業の歴史の中で必然的にかたちづくられたのだろう。亀山区では，奥野儀之助家が代々庄屋をつとめたこともあって，亀山全35戸のうち24戸を従えて特別に大きいが，こうした親方関係の中で，建物・倉の総面積などから判断して，集落中央部に位置する奥野儀之助・奥貞雄，入口部の亀井重衛門・脇野勝好，末端部の亀井政一・仁谷義教が特に注目される。彼らの多くが，もともと庄屋や海産物問屋や造り酒屋であったことも一考されてよかろう。また「ハシ」の仁谷には，湾内外の魚の動きを見張る地の利もあったろう。

だがもっとも注視すべきは，これら三組の親方衆の家の位置が，この集落のもつ三つの広場と，それぞれ対応していることだろう。奥野家前の中央広場は，氏神弁財天から下ってくる道とも合して，祭にも使われ，亀山のハレの中心である。末端広場は共同網干場・揚台・肥料工場に潮見の機能を加えて，集落のケの拠点，そして亀井家まえの入口広場も，網の修理や前面海中に生簀をそなえて，ケの拠点と考えられよう。

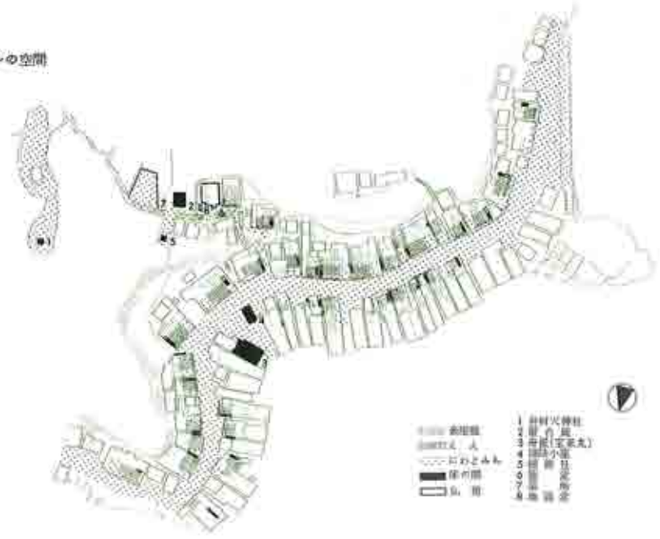
なおまた，亀山集落の裏山，中央広場から登ったところは，氏神弁財天を最高部に，墓地・稲荷(いなり)社・屠台蔵・地蔵堂・お籠(こも)り堂を集め配して，集落全体の精神的地域を形成している。

外部空間の領域

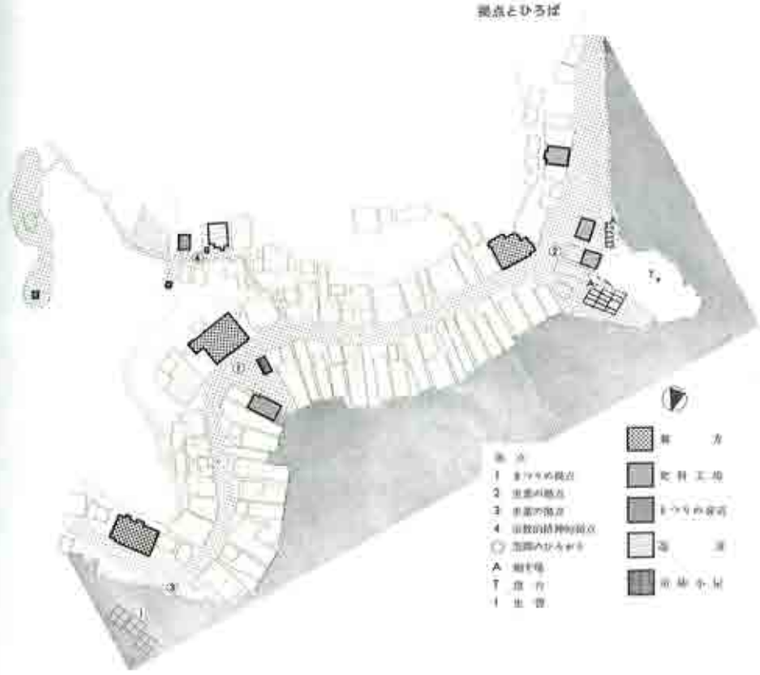
ケの空間



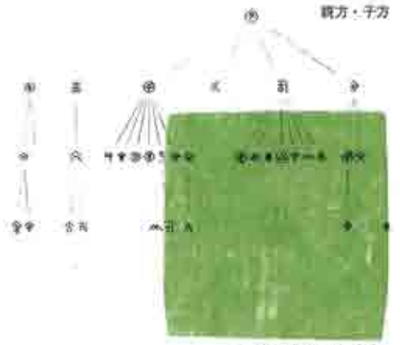
ハレの空間



拠点とひろば



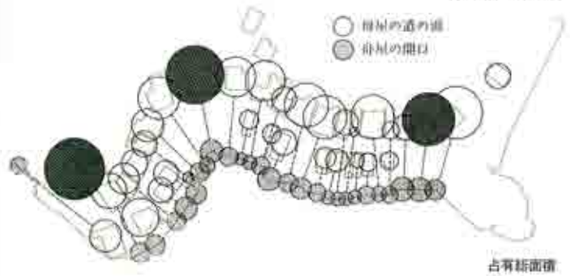
親方・子方



マスの底に押された焼印

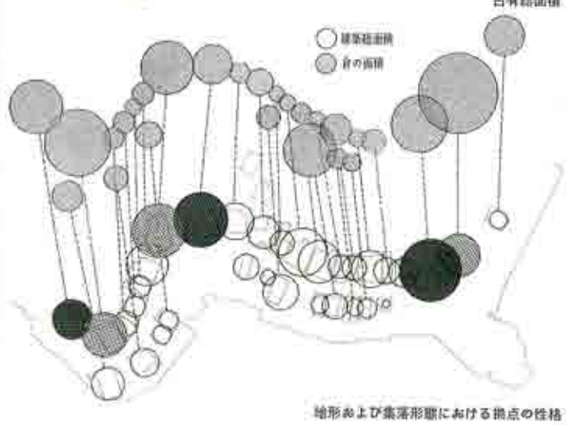
床の間

母屋と舟屋の開口



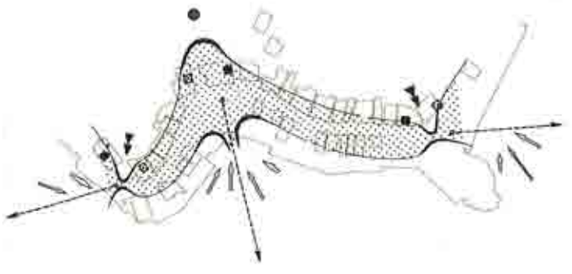
東の広場

占有断面積



中の広場

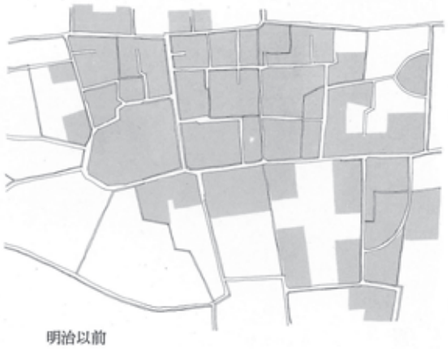
地形および集落形態における拠点の性格



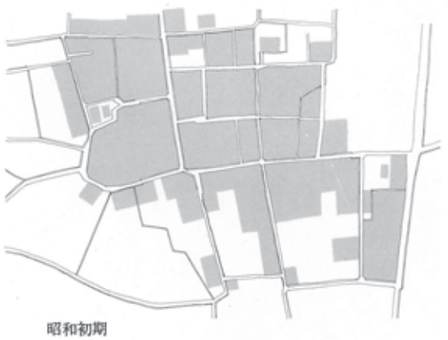
正村の通り：　ガラスの窓、2 階の手摺、方づえのくりかえし

善覚寺と並んだランドマーク・小泉邸

かつての商人の街もしだいにさびれていく／村落の推移



明治以前



昭和初期

戦後

全体平面　S=1:1000（原本100%）